改めて労働組合の存在意義について

金沢大学人間社会研究域学校教育系　教授　村井 淳志（むらい あつし）

「組織」が嫌いな現代日本人

全大教ではずっと、組合員拡大を活動の重要な柱と位置付けてきました。にもかかわらず、30年前の結成時、3万人いた組合員は現在、半分以下に減少しています。

原因はいろいろ考えられます。教職員の絶対数が減らされてきたこと。若手教員のポストに任期が付き、年俸制に移行するなど不安定雇用が増えてきたこと。そして教職員の多忙化により組合活動に時間やエネルギーを割くことが難しくなってきたこと。それともう一つ強く感じることは、「組織」に対する不信や不安の広がりです。

私自身、「組織」が好きではありません。学生時代の反省から政治的な組織にはなるべく近づかないようにしていますし、町内会も付き合い程度に留め、50歳を過ぎてからは学会もほとんど辞めました。必要な社会的サービスがお金でほぼ購入できるようになった80年代以後の日本人にとって、他人との付き合いを強制されること（組織）ほど不愉快なことはありません。ではなぜ私は組合に所属し、あまつさえ役員までやっているのでしょうか。

「職場」という組織の脅威

いちばんの理由は、「組合」という組織よりも、「職場」という組織の方が脅威だからです。社会人が否応なく所属しなければならない組織は職場です。ところがその職場は、必ずしも従業員を大切にしてくれる職場ばかりではありません。むしろその逆です。

従業員の雇用数や賃金水準が純理論的にどのようにして決定するか、御存知でしょうか。モデルは民間企業です。以下、サムエルソン『経済学』(下)（岩波書店）第28章「賃金と労働市場」の記述に基づいて説明します。マルクス経済学は賃金＝労働力の生産コスト（労働者本人と家族の生活費）で説明しますが、これは絵空事ですね。新古典派経済学は、限界生産物説で説明します。新古典派経済学でいう「限界」とは、「追加でもう一単位」という意味です。労働者ゼロの場合、生産していないのですから、生産物の価値はゼロです。そこから一人、二人と労働者を増やしていくとします。「追加でもう一人」労働者を雇用することで生まれる生産物の価値を曲線で表すと、当初は急上昇し、やがてゆっくりと減少していきます（限界生産物の収穫逓減）。そして最後は、労働者を「追加でもう一人」雇うことで生まれる生産物価値と、雇うことで生じるコストが一致する地点まで来ます。企業はそれ以上、労働者を雇いません。また重要なことは、最初に雇われた労働者がどれだけ高い価値を生み出したかとは無関係に、すべての従業員の賃金水準は、最後の労働者が生み出す価値（すなわち限界価値生産物に一致）になるのです。

若いときにこれを読んで、資本主義経済はなんて合理的にうまくできているのかに感動すると同時に、資本主義はなんて冷徹なシステムなのかと空恐ろしくなりました。この限界生産物説は他の生産要素（土地、原材料）にも共通で、要するに企業にとって見れば、労働力は他の生産要素のまったく同じ収穫逓減曲線によって数と費用が決まる一要素に過ぎないわけです。

言われてみれば当たり前なのですが、しかしそうは言っても、**従業員は部品ではありません。生身の人間です。人生設計もあれば、家族もいます。**この論理がムキ出しに貫徹されてはたまりません。

「労働組合」という解毒剤

この矛盾の狭間で自然発生的に生まれたのが労働組合です。基本的には従業員を一部品としか見ていない企業体という組織に対して、解毒剤の役割を果たす組織として作られたのが労働組合です。この解毒剤がなければ、企業の労務政策は、限界生産物説をベースに貫徹し、従業員をいつでも取替可能な部品としてしか見なくなります。

私個人としても「職場が脅威」の思い出があります。今から十数年前、脳梗塞をやった経験です。人間は「心地よい多忙」にはかなり耐えられますが、人間関係の悪化には本当にもろい生き物だなとつくづく思いました。眠れない夜が続き、おそらく血圧が200を超えていたのでしょう。突然、左手と左足に力が入らなくなりました。自分の手でありながら自分の自由にならず、左手で麦茶のボトルを持つことも出来なくなったのです。左足にも力が入らず、従って直立二足歩行が出来なくなりました。今思い出しても、恐ろしい経験です。幸い、十日ほど入院して点滴を受けた結果、治りました。

繰り返しになりますが、「職場は脅威」なのです。従業員が「私は生身の人間です。部品ではありません」と言い続けない限り、労働力＝限界生産物説は貫徹します。公共部門とても、ベースは官民比較ですから、例外ではないのです。

東京都立大学博士課程人文科学研究科教育学単位取得満期退学。
専門は、歴史教育・社会科教育論。著書に『学力から意味へ』、『歴史認識と授業改革』、『「いのち」を食べる私たち』、『脚本家・橋本忍の世界』、『勘定奉行 荻原重秀の生涯』など多数。
2003年～金沢大学教授。
2007年より全大教中央執行副委員長として活躍中。